

均質化と多様化の界面に居て 思うこと



大阪産業大学 経済学部
教授 富澤 拓志

とみざわ ひろし

1967年兵庫県生まれ。1997年京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得後退学、名古屋商科大学商学部非常勤講師等を経て、2002年産業技術総合研究所にテクニカルスタッフとして勤務。2006年鹿児島国際大学経済学部にて奉職し、地場産業論、中小企業論、地域経済論、インターンシップ等を担当。2015年大阪産業大学経済学部に移り、経済地理、経済学特殊講義（中小企業論）等を担当、現在に至る。

論文は、「地方分工場の未来と産業集積」三大学院共同出版編集委員会ほか編『地方は復活する』日本経済評論社（2011年）「南大隅町の産業構造と経済の循環」地域総合研究 43巻（2016年）ほか多数。

私が大学・大学院で経済学を勉強していたのは80年代から90年代で、その頃の経済学には、市場原理の貫徹とグローバル化が世界を均質化するというイメージが薄く広く広がっていたと思う。それから三、四十年が経ち、その頃想定されていた世界規模の市場化条件は、旧社会主義陣営の市場化と、インターネット・情報通信技術と物流の大革命によって一定満たされることになった。実際、今の国際経済学と国際産業論では、小企業ですら海外事業所を持つのが普通、原材料調達から消費者への製品配送までの全ての工程単位で、その拠点の立地が世界的規模で分散（フラグメンテーション）・編成されるという考え方（グローバル・バリュー・チェーン）が主流になっているし、現象的にも、民族的伝統を色濃く残す社会においても欧米発祥の製品やサービスが流通して、生活スタイルや文化の差異はかつてより小さくなっている。

このようにかつて主流であった地理的・物理空間的な共同体領域の境界は希薄化したが、しかしそれと同時に、現代の私たちのソーシャルネットワークワーキングサービス（SNS）生活から見えてくるのは一様化とは真逆の世界である。そこでは、地理的距離を超えた「コミュニティ」が無数に生ま

れ、人々はその「コミュニティ」に複数足を突っ込んでいるのが普通になっている。その「コミュニティ」は趣味嗜好や政治志向、生活上の利便性などで細かく分かれ、常に生成・分化・融合・消滅を繰り返しつつ増殖し続けている。大胆に概括すれば、現代は地理的な多様性を徐々に喪失しつつ、文化的・社会的には多様性を鮮明化しさらに多様化・複合化する時代と言えるだろう。近年社会問題化している格差・分断・孤立化の背景には、こうした「コミュニティ」のモザイク化の影響もあるように思う。今振り返ってみると、我々人間とその社会は、20世紀の経済学がイメージしていたよりも（もちろん当時からの傾向を言い当てていた論者はいたが）遥かに多様かつ複雑な存在だったのだ、というのが私の実感である。

地理的距離を超えて人々の活動が離合集散を繰り返す社会、それが現代の一つの特徴だろうが、翻ってビジネスの側に目を向けてみると、それに伴って生産過程、すなわち製造とサービスもいっそう柔軟化せざるを得ないのだろうと私は思う。もっともマクロ的見地から言えば、そのインフラたる情報ネットワークと物流がプラットフォーム産業化しつつあることが政治上のリスクと経済上の独占の問題を招かないか気がかりではある。だ

がさしあたって、我々個々の存在としては、そのプラットフォーム上で機敏な経営を実現するよう努力せざるを得ない。SNSや生成AIの消費生活への急速な浸透はますますマーケティング戦略の重要性を高めるであろうし、金融環境の変化は経営の体力と健全化をますます要求するようになるだろう。

生々流転が世の習いだとして、その波は多数あり、その振幅と波長は波によって異なる。どの波に乗るか、乗っているかによって準備すべき柔軟化の程度は異なるだろう。だが、単に波を乗り越えることだけに意識を向けすぎると、自分の流れ着く先はその波に連れて行かれるばかりになりかねない。流れに棹さすには、昨今流行のESG経営ではないが、自分はどんな価値の創造を目指すのかという問いを深耕し、経営はその実装過程であるという基本を忘れないことがますます大事になってきているのではないかと。そして、この人間と社会の多様性と複雑性に目をこらすことが先行きを見る目につながるのではないかと。神は細部に宿るとも言う。年々厳しさを増す私立大学の教育現場にいて、徐々にその思いが強くなっている。